

令和6年度 八王子市立元木小学校学校経営報告書

校長 寺本 英雄

I 本年度の取組と自己評価

昨年度に引き続き、スローガンに「学校・保護者・地域の方々の連携による『チーム元木』で『笑顔があふれる学校』に ～共育・協育，今日行く～」を掲げ、一人の児童についてできる限り最大限の大人が情報共有して、協力して育てること（共育・協育）、児童への初期対応・指導・支援は、気持ちに寄り添って、今すぐに行うこと（今日行く）に取り組んだ。

本年度は「after コロナ」を見据え、コロナ禍中にできなくなっていたり、縮小していたりしていた教育活動の見直しや再開を行った昨年度の実施状況を鑑み、学校行事の改善や地域行事への参加等、今後の活動につながるように努めた。

スローガンに掲げたように、保護者や地域の方々を含め学校外の方々との連携「チーム元木」を目指して、放課後子ども教室、小津倶楽部、学童、おやじの会、恩方夕やけスポーツクラブ、地域農家の方、地域自転車店、刀鍛冶、多摩織講師、昆虫展・授業、日野レッドドルフィンズ、環境カウンセラー、そろばん講師、高尾警察署、消防署（起震車、煙ハウス）、スクールガードリーダー、見守りボランティア、図書整理ボランティア、図書読み聞かせボランティア、授業支援ボランティア、放課後補習ボランティア、アウトリーチコンサート、箏講師、小田野中央公園まちづくりの会、「租税教室」、「ネット安全教室（NTT 東日本）」、八王子市生活安全部防犯課、学童、聖パウロ学園高等学校生、生け花講師、「水道キャラバン（東京都水道局）」、「八王子市版 笑顔と学びの体験プロジェクト」、「超シャボン玉ショー」、子どもの居場所づくり「宝生寺団地 FS クラブ宝友」、はちびバ元八王子（子ども・若者育成支援センター）はちまるサポート、子ども食堂、恩方市民センター、児童館、青少対、民生委員、学区内町会、住民協議会、他（順不同）を、ゲストティーチャー等としてお招きしたり、サポートしていただいたりして、共に授業や活動等を行うことができた。また、教育活動の支援をしていただいた。

また、月1回実施している学運協（情報共有会議や学校参観等）では、本校の諸課題について、国や都の施策のみで解決策を考えていくのではなく、この地域の実態に応じた御助言や御協力をいただきながら、最善策を共に考え、取り組むことができた。

東京都の教員不足の影響を受け、一昨年から算数習熟度担当教員の配置ができていなかったが、3学期から配置し習熟度別指導を実施することができた。

（1）今年度の重点目標

令和6年度は、『考える子』を重点目標とし、ICTのメリットを活かした活用とともに、ノートやワークシートのメリットを活かし、併用を図りつつ、個別最適な学びと協働的な学びの一体的

な充実を図る。また、ユニバーサルデザインを意識して、学習の基礎基本が「分かった。できた。身に付いた。」と実感できる授業を行う。

そのために、環境づくりを通して、言語能力を土台として、児童の情報活用能力、論理的思考力を育て、主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善を行うとともに、個に応じた課題を家庭学習やパワーアップタイム等を活かし、習得目標問題の確実な定着を図り、学力・自己肯定感の向上を目指す。

※数字%は、肯定的な回答割合

ア 確かな学力の育成

昨年度より新たに「ペアやグループ等、友達との関わりのある授業の実施」に取り組み、児童の肯定的な回答 81.2% のスタートを切り、本年度は 83.4% へと向上させることができた。また、教員自身による学習個別対応評価（R5：90.9%・⇒R6：94.5%）も向上させることができた。しかし、全国学力・学習状況調査の学力正答率は、全国平均値よりも国語・算数ともに低く、児童自身による学習意欲評価（71.1%）についても向上させることができなかった。しかし、市の生活及び学習に関するアンケート（5・6年生対象）における「授業では、学習の課題を解決できるよう自分なりに工夫している」の集計結果の肯定的な回答率を平均と比較すると「市：86.1%、本校：88.4%」となっている。次年度は、この子どもたちの学ぶ姿勢を活かし、学力向上につなげていきたい。

イ 豊かな心の育成

安心して通える環境づくりを目指してきた成果として、「子どもたちがよりよい学校生活を送れるように生活目標を設定したり、きまりを守ったりする指導を行っている（保護者評価）」が 86.3%（R5：81.8%）へと向上した。また、あいさつについては、さらに学校内外で、自分からあいさつできる児童の育成を図っていきたい。

いじめ防止への教員の取組に対する児童の評価は 83.7% であった。この数値はさらなる向上を目指して、徹底を図っていく必要がある。一方、全国学力・学習状況調査「質問調査」の「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思うか」、「人が困っているときは、進んで助けているか」「先生は、あなたの良いところを認めてくれると思うか」に対する「全くそう思わない」との解答は、全項目ともに「0.0%」、市の生活及び学習に関するアンケート（5・6年生対象）における「こんなことができるようになりたい、という目標（現在の夢）をもっている」の肯定的な回答率は「市：87.5%、本校：93.2%」となっている。これらの結果は、豊かな心の育成に向けた取り組みの成果の1つだと捉えている。

また、教員の協働により「自分は自分や友達の大切さを認め、行動することができる」という児童（自己評価）は 90.6%（R5：90.6%）となっており、豊かな心の育成を図ることができた。今後は、さらに、いじめ防止の取組を児童・保護者に実感してもらえるように推進していく。

ウ 学校・保護者・地域の方々との連携

学校運営協議会と協働し、教職員・保護者・地域の協力体制のもと学校評価を進め、PDCAサ

イクルを確立させて教育内容の質を向上させていくことを目標として取り組んだ。学校運営協議会との連携は、原則月1回の定例会だけではなく、適宜、情報共有を行い、理解を得るとともに、必要に応じて保護者・児童への支援を得て、学校運営を行うことができた。

前述したように、保護者や地域の方々を含め学校外の方々との連携「チーム元木」を目指し、学校運営協議会の協力を得て、授業や生活の支援ボランティアを募り、協力を得ることができた。

また、本年度も、地域の実情を知ることを含めて、地域の夏祭り、市民センターまつり（希望児童が舞台発表に参加する校内体制の確立）、地域防犯見回り、クリーン作戦、資源回収、地域運動会、その他の地域のイベント等、できる限り参加し、本校の子どもたちが学校外で生活する地域を知ること努めた。

学校の教育活動について情報発信をしていくために、昨年度より、学校ホームページに「校長室より」を新設し、ほぼ毎日、記事を掲載し、情報発信することができた。保護者評価による「適切な情報提供」は96.5%（R5：93.0%）へと向上させることができた。

◎：成果・大、○：成果・中、▲：課題

（2）具体的な取り組み

ア 学習指導

- 学習スタンダードに基づいた授業：全校で発達段階に応じた統一された指導。
- ICTの利活用：ICTガイドラインを遵守し、ICTミニマムの確実な実施と効果的な活用方法の探求（個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して）
- ▲習得目標問題に特化した国語・算数のICTを活用したドリル学習、個に応じた課題・宿題（学年×10～15分）、パワーアップタイム等の活用、学力調査等のアセスメントに基づいた指導を行い、個別最適な学びの実現。
- 読書活動（年間学年×1000ページ目標）の推進
- 環境づくりを通して、言語能力を土台として、情報活用能力、論理的思考力（必要な情報選択・読解力）を育てる授業。ペアやグループからクラス全体に広げていく対話的な学びの充実
- ◎学習指導要領に準拠し、単元配当表に基づいた先を見通した漏れの無い教育活動の推進

イ 生活指導

- ◎生活スタンダード・教室環境のUD（ルールのある空間で皆が快適に生活できる環境整備、暗黙のルールに見える化、子どもの良いところが発揮される環境）及び体罰・暴言の排除等の徹底
- ・友達の良さと自らの良さを認め大切にする自己肯定感、自己有用感、自尊感情の育成、他者理解・他者尊重の精神の向上
- ・笑顔であいさつ・感謝をしっかりと伝えられる子を育成し、けじめを付け、みんなが気持ちよく過ごせる環境醸成

- 人的環境のUD（「分からない」「できない」が出しやすいクラス・学年づくりの推進。毎週のいじめ対策委員会を軸に、多面的な児童理解、パワーアップタイム等を活用した個に寄り添う指導を通して、いじめ・不登校の未然防止・適切な組織的な対応）
- ◎特別支援教育の充実（すまいる教室との連携、個別支援シート等の有効活用、個に応じた指導の推進）
- 外遊びの奨励（週1回一緒に外へ）、クラスレクの活用、体育の日常化
- ◎清掃活動や当番活動にしっかり取り組み「人の役に立つことを喜びとする」児童（教員は見回り・賞賛を重視）規律と秩序のあるきれいな学校
- ◎登下校・校舎内外での安全確保
- ◎校内委員会やSC、SSW、関係機関等との連携と活用

ウ 学校運営

- 一人の児童をできうる限り最大限の教職員が関わっていくために、ブロック運営を強化し、担任及び専科・すまいる教室教員が連携を密にして、多面的な児童理解による指導・支援を行っていく。
- ◎必置主任・ブロック主任を軸として、組織として対応し、報告・連絡・相談を重視し「チーム元木」として全員が協働する、笑顔で明るく元気な職員集団を形成
- ◎学年運営強化：学年内交換授業・道徳で授業力・生活指導対応力等の向上
- 教職員のワークライフバランス推進のため、東京都教育委員会が示す「働き方改革」に則り、校務の効率化（分掌提案・教材のデジタル化・共有化、ICTの効果的な活用等）による負担軽減で児童と向き合う時間を確保し、教員同士が互いに支えあい、定時退勤（月1回以上指定）日だけではなく、各自の都合に合わせて、週に1日以上以上の定時退勤を目指す。

エ 特別活動・その他

- 協働的な学びにつながる学級会等の計画的な実施
- ◎異学年交流・縦割り班活動での児童の内面の充実・校歌がしっかり歌える子の育成
- ◎～○環境整備、安心・安全・きれいな学びの場づくり推進
- ◎with コロナ・after コロナにおける危機管理、教育活動の再構築、及び、学校運営協議会をはじめ、保護者・地域を積極的に活用し、しっかり情報発信し信頼される学校

オ 能力開発、研修・研究

- 授業観察（計画的に相互参観）で、ICTを利活用した個別最適な学び・協働的な学びを意識した授業、学級会をそれぞれ年間1回以上実施。
- 校内研・OJT・市教研等校外の研修会に主体的に参加・全員（校内）への還元
- 9年間を見通した教育課程の実施（小中一貫教育の推進）

Ⅱ 次年度以降の課題と対応策

ア 学習指導について

来年度は、学力向上を目指し、特に、教科愛好度が低い算数の強化を図っていく。まず、校内教員配置を工夫して、算数少人数担当教員の未配置を解消し、年度当初より習熟度別での学習ができる体制を整えていく。また、アシスタントティーチャーによる複数（T・T）指導の効果的な活用を推進していく。放課後補習については、対象を第3・4学年に絞り、実施頻度を高めるとともに、任意参加ではあるが、積極的に参加を呼び掛けていく。

※学習スタンダードに基づいた授業：全校で発達段階に応じた統一された指導。

⇒学習の基礎・基本から築いていくために、全校での学習スタンダードの徹底のために、校内研究とも関連させて、全教員で共通理解及び視点を絞った活用を図っていく。

※ICTの利活用：ICTガイドラインを遵守し、ICTミニマムの確実な実施と効果的な活用方法の探求（個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して）

⇒今後のデジタル教科書の普及も視野に入れ、ICTのメリットについて研究を進めるとともに、従来のノートやワークシートのメリットを活かし、併用を図っていく。また、ICTリテラシーについては、日々変化してくことを踏まえ、継続的に繰り返し指導をしていく必要がある。

※習得目標問題に特化した国語・算数のICTを活用したドリル学習、個に応じた課題・宿題（学年×10～15分）、パワーアップタイム等の活用、学力調査等のアセスメントに基づいた指導を行い、個別最適な学びの実現。

⇒個に応じた課題・宿題を含め、個別最適な学びについては、重要性を認識している。今後、各学級で実施しているパワーアップタイム、第3・4学年で集中して行う放課後補習において、対応していく。

イ 生活指導について

◎生活スタンダード・教室環境のUD（ルールのある空間で皆が快適に生活できる環境整備、暗黙のルールに見える化、子どもの良いところが発揮される環境）及び体罰・暴言の排除等の徹底

⇒本年度の校内研究で生活スタンダードの周知の工夫等について研究を行った。これらの成果を次年度に活かし、さらに改善を図っていく。

◎特別支援教育の充実（すまいる教室との連携、個別支援シート等の有効活用、個に応じた指導の推進）及び人的環境のUD

⇒本年度、特別支援教育について理解を深めるために、月に1回、学校ホームページにおいて、学習の様子を発信した。また、複籍交流（直接）の充実を図った。

今後も、特別支援教室（すまいる教室）拠点校となっていることを活かし、通常の学級に生か

す特別支援教育の意義や在り方を，保護者，地域へ情報発信し，理解及び利用を広げていく。

ウ 学校運営

○教職員のワークライフバランス推進のため，東京都教育委員会が示す「働き方改革」に則り，校務の効率化（分掌提案・教材のデジタル化・共有化，ICT の効果的な活用等）による負担軽減で児童と向き合う時間を確保し，教員同士が互いに支えあい，定時退勤（月 1 回以上指定）日だけではなく，各自の都合に合わせて，週に 1 日以上の上り退勤を目指す。

⇒引き続き，東京都教育委員会が示す「働き方改革」に則り，校務等の効率化を図り，「チーム元木」で教育の最大限の成果を発揮できるように努める。

エ 特別活動・その他 及び オ 能力開発，研修・研究

○協働的な学びにつながる学級会等の計画的な実施

○授業観察（計画的に相互参観）で，ICT を利活用した個別最適な学び・協働的な学びを意識した授業，学級会をそれぞれ年間 1 回以上実施。

⇒今後も，協働的な学びを深めていくために，個の学びの時間を確保したうえで，ペアやグループでの学ぶ時間を計画的に取り入れていく必要がある。